概　要　報　告

実施期日	８月２日(金)
部　会　名	小学校　生活部会

神奈川県研究主題

『カリキュラムマネジメントによる学校教育の改善・充実　～社会に開かれた教育課程の実現～　』

テーマ

『　小さな物語が大きな物語観を変容させる　プロジェクト型学習の整理　　』
～教師が多様な次元で聴くことと、子どもが対象と出会い直すことのつながりを見つめる～

提案概要

①　テーマについて

提案者は生活科の授業を通して子どもたちとどのような学びを作っていけるのかを考えた。まず、「活動あって学びなし」という言葉について考えどころであると捉えた。地域とのつながりや学校としての経験が蓄積されている前年度踏襲のカリキュラム編成は、学校そのものに最適化されていて、質の高い学びを保証できるものである。しかし学習内容がおおよそ決まっている場合、子どもに対して「こういう姿に育ってほしい」「こういう学びを得てほしい」という教師のねらいが強すぎてしまい、子どもたち自身から生まれた学びを十分に見とれないかもしれないと考えた。そこでプロジェクト型学習（PBL）を採用した。PBLは、対象について教わるだけでなく、子どもたちそれぞれが自分にとっての意味を見出し、その対象を再発見し、自分なりの見方・考え方を持つことに迫る学びの形である。教師は子どもの姿・活動の前後から文脈を見いだし、何が学びとして成立したのか、どんな学びが生まれたのかについて見とりを続けた。

②　単元構成と年間の活動履歴

４月～	◎　公園とは何か？ 〇公園探検をしよう 〇色々な公園との出会い 〇公共の意味を考える	・まちたんけんをしながら地域の公園と出会う。 ・ボールで遊んでいい公園と、だめな公園があるよ。 ・遊具がある公園　何もない公園　自然豊かな公園 ・トイレはきれいに使うってどういうこと？
６月～	◎　自然を管理する 　　意味とは？ 〇雑草を集めよう　育てよう 〇秋探しをしよう	・雑草にはいろんな工夫があるね（国語科とのつながり） ・拾った種を植えたら芽が出てくるかな？ ・台風の次の日は折れた枝がいっぱいあるね。 ・公園の枝は、持って帰っていいのかな？
12月～	◎　公園愛護会をつくろう 〇公園愛護会って何だろう？ 〇愛護会として活動しよう	・愛護会っていう係活動があるんだって。やってみたいな。 ・まずはおそうじをしよう。新しい遊具になるんだって。 ・新しい遊具を作るから、公園が使えなくなっちゃった！
２月～	◎　一人に一つの 　　プロジェクト。 →愛護会の未来を考えよう。	・落とし物を持ち主に返したい。 ・危ない枝を切って安全な公園にしたい。 ・公園にゴミ箱を置きたい。 ・保育園児に公園を紹介したい。　Etc….

③　プロジェクト型学習の評価について

PBLでは、子どもたちの学びが個人プロジェクトになるため、ゴールも成果も人それぞれになる。そのため量的な評価は不可能に近いので、質的な評価がメインになってくる。質的な評価の方法として、【無意識に現れたものからの評価】がある。記述や語りなどの無意識に現れたものから、その子がどんな文脈で今日の活動を意味として捉えたのかを探るには、その子どもが活動してきた履歴を担任がしっかりと把握している必要がある。そのために、子どもの語りと活動を証拠としてたくさん蒐集しておいて、評価に生かすことが大切である。

協議の柱及び協議概要　質疑応答

①　公演愛護会の実践から考えたことを聴いて

～公園愛護会はどの学校でも実践可能な地域の材・公園という材の価値についてどう考えるか～

②　プロジェクト型学習（PBL）の学びについて、メリットやデメリット

（生活科の学びにつなげるための教師の仕掛けはどんなものがあったのか。）

プロジェクト型学習では、しかけはしかけるほど子どものやる気はダウンする。教師の役割としては対象と関わる環境を整えること。環境とはつまり【機会・場所・時間・許可】であり、これらをを十分に与えることで子どもは活動に没頭できる。

（公園に出かけるときの体制は？担任一人での引率は大変ではなかったか）

年度初めは保護者や１年生サポートの職員の力を借りて公園まで出かけていた。回数を重ねる毎に、子どもたちも校外学習に慣れていったので、担任だけで連れて行けるようになった。

（公園にかなり通い詰めて活動をしていたようだが、他のクラスも同じように活動していたのか）

教科横断的に学習していたので、国語や図工の時間もうまく利用して学びを進めた。他のクラスは違うテーマで生活科に取り組んでいたので公園愛護会の活動はしていないが、今年度はまた違うクラスが愛護会を引き継ごうかという話になっている。年度が変わると、子どもの環境（学年・クラス）も変わり、プロジェクトをそのまま続けることは難しい。担任同士で材について引き継ぎをしたりすることは必要だが、それでも子ども一人一人の中に１年間の学びは構築され、次の学びへとつながっていくはずだと考える。

（公園愛護会が解散して、荒れた公園を見て子どもたちはどう思っていたか）

６月くらいまでは自主的に掃除をしたりゴミを拾ったりする子もいたが、だんだんとやらなくなった。子どもの視点が次の段階に進んでいるからだと考えられる。公園に対する行動は伴わなくても、思考は進んでいるはずである。

まとめ概要

持続可能な社会の創り手の育成、ウェルビーイングの向上という観点からも、生活科でプロジェクト型学習を取り入れる意義は十分にある。PBLを実践することで、幸福感や多様性への理解、社会貢献意識、自己肯定感、自己実現を調和的・一体的に高めることができるだろう。今回の実践では、個人のプロジェクトを進める一方で、クラスの仲間とゆるやかにつながりながら協働的に学ぶ面も確かに存在していた。それは社会の中に存在する自分という存在に気づきながら、問題解決に向かう力へとつながっていくのではないだろうか。また、公園という多様な活動が可能な環境は、子どもたちにとって多くの体験と学びを得るのに最適な材であり、自由度の高い環境で終始子どもたちは活動に没頭することができた。その活動の様子を温かく見守り、多面的な姿を的確に捉え評価につなげられたことも、生活科の学習としての大きな成果である。